

学校法人 今治明德学園
中長期計画（改定版）

（今治明德高校・今治明德高校矢田分校
・今治明德中学校分）

令和3年度～令和7年度

令和3年3月

本計画は、「建学の精神と学園の使命」を達成するため、策定された「ビジョン」をもとに、今治明德高校・今治明德高校矢田分校・今治明德中学校の目指すべき基本的な方向と主要な課題を示すものである。

1. 現状分析

(1) 本校・分校・中学校共通事項

今治・東予地区全体の児童・生徒総数は毎年減少している。特に高校においては、例年、東予地区の中学卒業生数より、東予地区高校入学定員総数の方が多い現状である。

(例：平成27年度東予地区中3生総数4469名→

令和2年度東予地区中3生総数3841名：619名減)

そのため、各公立高校の志願倍率が下がり、不合格者がほとんどいなくなったことで本校への入学者はほとんどいない状態でもおかしくはない。

◎ 教員の教科別年齢構成について

また、本校・分校・中学校それぞれの各教員の年齢構成バランスと各教科間の偏りがみられ、適正な教員配置が難しくなっている。(教員によっては免許状が高校のみの場合があり、異動ができない場合もある。)これは、教員募集しても、なかなか希望者がおらず、面接する際も、十分な選考ができず、とりあえず採用する状態である。

(2) 今治明德高校本校

◎ 各公立高校の志願倍率が下がり、不合格者がほとんどいなくなったことが一番大きい要因であると考えられる。また、本校普通科入学定員240名のうち入学者は平成28年度から100名を下回り、令和元年度入学生は70名となった。

そのような条件の中で入学してくる生徒の質は下がり、生徒指導・学習指導・進路指導が困難になっていった。そのうえ、学校の経営面を考慮して、退学者をできるだけ少なくするようにしたのでますますクラス運営が困難になり、教員のモチベーションも下がっていった。生徒の質が下がるにつれて生徒指導が大変になり、家庭訪問等負担も大きくなっていった。

◎ 教育課程については普通科の中で進学コース・総合コース(4系列)・美容コース・チャレンジコースを設定しているが、特に進学コース・美容コースの生徒数が20名以内くらいと少ない。

また、総合コースも4系列に分かれて担当教員。外部講師が多数必要となり、時間割編成も困難となり、人件費等も多くなっている。それぞれのコース設定の方法・内容ももう一度再点しなければならない。

◎ 現在、本校には運動部11、同好会1、文化部8ある。そのうち運動部は熱心に活動しているのは陸上部、柔道部、野球部、バドミントン部であり、その他の部活動は部員がほとんど集まらず、成果を出せていない。文化部はどの部活動も満足に活動はできていない。

(3) 今治明德高校矢田分校

昨年度まで、矢田分校単独で収支はプラスであったが、定員80名のうち今年度入学者が卒業生数からマイナス26名となり収支が赤字となった。今まで、矢田分校は入学者が今治西高

校・今治北高校の不合格者が約半数以上いたが、その不合格者がほとんど皆無となり、矢田分校入学生の減少につながった。また、中学生の生徒数の減少にともない、推薦入試の資格を評定平均値を2,5に下げ、中学校側からすれば矢田分校へのハードルが下がり、その存在価値が薄れて、推薦入学志願者が減少しはじめた。

入学者の減少と同時期から、学力レベルも下がりはじめ、そのことが大学入試の合格実績にも響いてきたので国公立大学の合格者が少なくなっていた。そのため、3年前からは7限目以降、全員での授業をやめ、学力・意欲の高い生徒に絞り、選択と集中し、成果が効果的に出るようにしている。その上、生徒減により、各学年がークラスのため2年時からの文理別クラス分けができない。生徒の希望に沿った進路指導が難しいので、どうしても個別での対応となる。

また、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止による緊急事態宣言のため、学校の臨時休校があり、高校生はほぼ全員スマホを持っており、受信環境も整っているのでリモート授業を実施することができた。今後の臨時休校での対応もできるように準備できた。

(4) 今治明德中学校

平成25年度以降は入学定員の約80名を確保できており、小学生・保護者からある程度支持されている。今治以外からも島しょ部や西条市から、JRや高速バスを使い、各学年20名以上が通学している。

しかしながら、現在、各学年3クラス、合計9クラスありながらも、国語科の教員が正教員1名、非常勤2名、理科の教員が正教員1名、常勤1名、非常勤1名であるなどクラス担任を配置することも難しくなっている。そして、教職員不足のため、一人ひとりの仕事量が増加し、職場がブラック化しつつある。

教育面では、公立中学校との差別化を図るため、独自の教育課程、学習サポートシステム、学校行事等を実施している。

特に今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止による緊急事態宣言のため、学校の臨時休校があり、リモート授業等実施する方向で進めているが、中学生は携帯電話を持っていない生徒もおり、現在環境を準備して、来年度からはリモート授業ができるように進めている。最近、全国でも使用されてきた電子黒板での授業も各クラスのうち60%程度実施することができた。

また、生徒数の増加にともない、学校生活に適応しづらい生徒も出てきていて教育相談・カウンセリングの重要性も増してきて教育相談担当のカウンセラーもフル回転している。

施設設備面では生徒数の増加により、教室数が不足気味になり、今後も生徒数が増加し続ければ、どうするかということも考えなければならない。

2. 各種取り組み

(1) 本校・分校・中学共通事項

地域の生徒（児童）・保護者から選ばれる学校を目指して

公立高校不合格者を集めることを基本にして学校経営を進めていくことはすでに限界がきている。そのため、公立高校補完（不合格者中心）校からの脱却を目指さなければならない。

特に保護者所得が年510万円以下の過程は国・県からの就学支援金制度での補助金で授業料

の全額補助が開始され、生徒・保護者も負担なく私立高校を選ぶことができるようになった。

このことによって生徒募集では公立高校と同じ土俵で勝負することができるので、ある意味ではチャンスととらえることができる。

◎ 教育課程の見直し

今回の中長期計画で取り組むべきことは、まず、魅力ある教育課程の策定である。中学生が高校進学決定にあたり、この高校に行けば将来への道が開けるような希望が湧き出るような教育課程の策定が喫緊の課題である。

旧来からの普通科という枠組みの中で各教科の学習だけでは生徒もモチベーションが上がらず、本校に入学したいという動機づけが弱いと考えられる。

特に、全国的に先進的な取り組みに挑んでいる高校がすすめている「探求の時間」等を調査研究し、本校でも取り入れることができるかどうか検討する。

◎ 教員の採用・教育・研修について

採用した教員の資質も向上しなければならないが、現在は体系的な新人研修・職員研修ができていないので、研修会・研究授業等を活性化しなければならない。

また、教員採用に関しては長期的な視野に立って、教科別教員の必要性を人件費等も考慮しながら効率的に進めていく。

◎ 教育環境（ICT教育等）の向上

国の生徒一人一端末の導入を目指した GIGA スクール構想や DX（デジタルトランスフォーメーション）を取り入れた教育改革などの流れの中、私学としては公立中学高校に後れを取ってはいけなないので、それなりの施設設備と人材を用意しなければならない。

特に、いまだに教員一人一人に PC が貸与されていないことから、最低限として教員にこの数年以内に貸与して、研修を実施し、先進的な教育を進めていきたい。また、施設設備面では各教室に電子黒板等の設備が不十分であるので、その整備もすすめていく。

◎ 地域連携・地域貢献

令和 2 年 9 月に学校法人今治明德学園と株式会社今治・夢スポーツは、連携協定を締結することになった。相互に連携・協力することにより未来を自ら切り開いて地域に貢献できる人材育成と活気あるまちづくりに寄与することを目的としています。また、学校法人今治明德学園の役員改選に伴い、令和 2 年 9 月 6 日をもって、「今治・夢スポーツ」代表取締役社長の矢野将文氏が理事に、代表取締役会長の岡田 武史氏が参与に、それぞれ新しく着任された。

今後は今治という地域が活性していくため、様々なイベントのボランティア等で学園の協力のもと、学生・生徒が参加することで、生きがいや将来に向かっての何かをつかんでくれるように方向づけしたい。

◎ SNS の積極的活用

近年、中学高校生は毎日スマホを長時間使用している。そのため彼らは様々な情報をスマホから得ている。SNS の重要性は日増しに高まり、中学・高校共にまだまだホームページの活用も不十分であり、そのうえで SNS を使い、学校情報をリアルタイムに発信していかなければならない。紙媒体では載せることができないような関係者の生の声等をしっかりと伝えていきたい。また、本人のやる気が出たり、保護者の悩みに寄り添うような子育てのヒントになるような情報も発信していく。

(2) 今治明德高校本校

110年を超える伝統がある本校は今治明德学園の根幹の学校である。卒業生も数多く輩出し、各方面で活躍していることから、本校の活性化及び、卒業生の理解や協力なくして、今治明德学園全体の発展は考えられない。

また、生徒数増加を目指すためには推薦専願者を増やすことが一番確実な方法であるので、そのための対策を講じなければならない。地道ではあるが、各コースや各部活動を魅力あるものとして専願者を増やすことが大切である。

※獲得したい生徒層としては今治南高校層・今治工業高校層・今治精華高校であるので、その3校をターゲットにして差別化を図るべきである。

特に、今治明德高校本校は中学時代には反抗したり、相手にされなかった生徒や学習面で取り残された生徒等が入学してくる場合が多い。そこで、本校で本人が学校生活で自信をもって高校を卒業して、次のステップに生き生きと挑戦する姿を中学校の先生に見せることができれば何よりの生徒募集の広告等になるであろう。

◎地域の生徒（児童）・保護者から選ばれる学校を目指すためには充実した学校生活（授業・部活動・学校行事等）、面倒見の良い対応、高校卒業後の進路保障などのはっきりした目標を掲げ、地道に実践していかなければいけない。この目標実現のためには各教員の活躍がとても大切になってくるので、教員にやる気になってもらい、生徒のために一生懸命努力するようになれば理想的である。管理職には教員を一生懸命に頑張るような雰囲気にすることが求められる。これが大変困難を伴うことであり、理事の方々の経験とお知恵も拝借したい。

◎部活動の活性化について

まず、顧問の一層の頑張りと同顧問自身が指導したい部活動がマッチしているかどうか調査する必要がある。また、生徒がやりたいような今の時代にマッチした部活動の設定も考えなければならない。たとえば、しまなみ海道の四国側入り口に位置する今治市のメリットを生かしたサイクリング部や世界中で注目され始めたゲーム機を利用した競技、E-スポーツ部、ヒップホップダンス部、スケートボード部などである。

予算配分も考えながら、部活動の選択と集中をすすめて「強化指定部」のように重点部活動には各種大会や遠征に対してサポートする体制も整えたい。そして、四国大会・全国大会等に出ることによって世間に強くアピールすることができれば生徒増につながる。

① 生徒募集に関する取組

本校の生徒募集は各中学校へのアプローチが中心である。特に、中学校教員との信頼関係の構築をすすめるためには、部活動でのつながりによって、コミュニケーションをとることから始めるべきであろう。そして、中学校側からの声に耳を傾け、修正すべき点は修正して、言えば対応してくれる高校として信頼を得るようになることが理想である。

そして、効果的な各中学校訪問の時期、回数を考えなければならない。その上で、訪問した中学校卒業生の現在の様子等をこまめにお知らせすることも必要である。

② 効率的・魅力的な教育課程の改定

教育課程については普通科の中で進学コース・総合コース（4系列）・美容コース・チャレンジコースを設定しているが、その中での総合コースの4系列の設定を見直し、あまり生徒の選択肢を増やさなくてもよいコース設定が必要になってくる。（教員一人当たりである程度の生徒を担当することができるようになることが望ましい。）そうすれば、多数の外部講師に来ていただく必要性がなくなり、時間割の組みやすさや、経費削減もしやすくなる。そのための教育課程やコース設定はよく考えて策定しなければならない。

③ 特色ある教育内容の策定

他校との競合の中で生き残るためには、本校独自の教育内容を設定し、本校独自の教材を設定したい。FC今治の試合観戦なども総合的な学習や特別授業として取り入れることもできる。

【チャレンジコース】

全国的に通信制高校が生徒数を増やしている現状を踏まえ、このコースにはニーズが多くあり、工夫次第で現在より生徒数を増やせる可能性がある。ただ、このコースはこまめな教育相談を積み重ねて生徒の信頼を勝ち取らないといけないので、カウンセラーの資質・能力が鍵を握る。現在、相談員の白石康子先生が大変頑張ってくださっていて、教員に対するアドバイス等が効果的なので、この指導方法を基本にして分校・中学校にも広げていかなければならない。このコースの生徒・保護者のニーズをよく考え、まずは卒業することを第一に、つぎに希望する進路実現が叶うようサポートしなければならない。

また、チャレンジコースや中学校と連携したフリースクール等の運営開始も視野に入れて生徒増につなげていかなければならない。

【美容コース】

全国的にも珍しい、このコースは創設14年になるが、各学年平均5～10人程度にとどまる。損益分岐点となる入学生徒数も考えながらその目標人数に達するためには、どういう方法をとればいいのか、その運営方法を再点検・再検討しなければならない。

(3) 今治明德高校矢田分校

まだまだ、**やり方次第で入学生徒の増加が見込める**学校である。

※獲得したい生徒層：今治北高校中下位層・今治西高校下位層

入学生徒増加のためには、矢田分校卒業生の国公立大学に合格者を増やすことが至上命題であることを教職員が肝に銘じておかなければならない。

そのため、本校同様、生徒数増加を目指すためには推薦専願者を増やすことが一番確実な方法であるので、そのための対策を講じなければならない。地道ではあるが、教育課程や特色あ

る活動を魅力あるものとして専願者を増やすことが大切であろう。

「質の高い生徒が入学してこないのに、進学実績が出せない。」という意見も聞くが、いくら黙って学校で待っていても生徒は増えない。現在の在校生徒に対しできる限り学力をつけて、希望する進路が実現できるようにサポートしなければならない。

また、FC今治との連携により、平成31年度から矢田分校にFC今治U18の生徒が入学するようになり、在籍数の4分の1くらいを占めるようになった。この生徒たちの進路指導を含め授業方法の工夫が大変重要になってきている。

矢田分校の教員の資質については、現在の生徒の学力レベルから考えると大学受験レベルの教科指導力より、まず、クラスの大学進学に向けての雰囲気づくりや生徒個々の心に沿ったサポートが必要だと感じる。進路指導レベルとしては初歩的にはなるが、今、分校教員がすべきことは難しい問題を解説することではなく、自立した学習習慣の確立ができるようにサポートすることが大切である。

① 生徒募集に関する取組

できるだけ中学校訪問をして、中学校教員との信頼関係の構築し、在校生・卒業生の情報をお知らせする。矢田分校の生徒は少なからず塾に通っているものも多く、塾の先生は矢田分校の授業の様子や教材、指導方法も塾に通っている分校生徒から聞いて知っている。今後は、そういう塾との連携を密にして、要望・改善点などの「声」を積極的に取り入れることも必要ではないか。塾の先生方も矢田分校を応援してくださる人が少なからずいるので、その塾と連携をとりながら、少しでも生徒増につなげていかなければならない。

② 効率的な教育課程の改定

現在、生徒数減のため一学年一クラスの編成となっている。一クラスでは文系・理系別授業の同時開講は時間割作成上や出張等の授業交代等が難しいが、教員の負担は増えるが一クラスでも、能力別レベルに分けて授業等で対応したい。そして、個人のレベルに対応した丁寧な指導をしていって生徒の信頼を勝ち取らなければならない。

また、正規の授業の後、「プロジェクトA（エース）」という制度で、英・数・国の3教科において学力上位の生徒に絞った授業を実施して上位層の学力向上を目指す。

③ 特色ある教育内容の策定

英語は文系・理系のどちらも入試で必須となるため非常に大切な教科である。特に矢田分校では以前より英語教育に特化していてそれなりの評価を得ていた。しかし、近年は英語の力が低下しつつある。しかしながら、学校案内等でも「英語の矢田分」ということを売りにしている以上、英語力を強化するシステムを再構築することが必要である。単語王・熟語王決定戦やシンガポール等への海外研修、英検準1級・2級などの資格取得に向けた講座開設なども充実・拡大する。

他には、スマホを利用して日本トップクラスの講師の授業が受けられるオンライン予備校「学びエイド」と提携し、自宅でも、部活帰りでも、低価格で質の高い授業が受けられるようにしているが、もっと有効的に使用し、学力の向上を目指す。

(4) 今治明德中学校

「落ち着いた環境の中で、レベルの高い同級生と切磋琢磨しながらしっかりとした学力をつける。」

現在、今治明德中学校の入学者は各小学校の成績上位層が多いが、優秀な児童も、授業料等の負担があるためがかかるため、公立中学校へ行く場合も多い。しかも、現在は高校入試の地域トップレベといわれる今治西高校の入試が定員割れする状態が出始め、無理に私立中学に行かなくてもと考える保護者も少なくない。そこで、今治明德中学校のスタンスとしては、希望する高校に合格するのが目的ではなく、入学した高校でどれだけ活躍することができるか。つまり、「次の進路に向けてつながるような学力がつけられるかということに重点を置いて指導する。」ということを強調している。

現在、地元からある程度の評価を得ているが、高校部の生徒減も見据えて、まだ募集の工夫をすれば生徒増が見込まれる。ただし、入学生徒増を計画するのであれば、教員の人員を増やし、質の向上を図らなければ、一気に評価は下がってしまうと予想される。また、施設設備の面でも現在の校舎のままでは教室が不足する等の問題点もある。

① 生徒募集に関する取組

中学校の募集に関しては、基本的に塾中心の活動となる。公立小学校は基本的に一私立中学校の募集に積極的に協力をしてくれない。学校説明会のチラシを配っていただけだけでもありがたいと思わなければならない。

その代わり、塾に対しては連携を密にして、塾訪問の回数を増やし、こまめに情報交換しながら協力できることは協力して、要望・改善点などの「声」を積極的に取り入れることが大切である。

② 効率的な教育課程の改定

教育課程については、学習指導要領のしぼりがあり、高校ほど独自のカリキュラムを実施できない。基本的には公立高校入学試験を見据えて教科書も公立中学校と同じものを使用しているが、分校同様、英語は私立進学校の使用している教科書を使用しているため授業の内容は難しくなるが、かなりの生徒は英検2級・準2級に合格できている。そのため現在は、今治明德中学校の一番の売りになると思われる。この指導方針は今後も続けていく予定である。

③ 特色ある教育内容の策定

今後、ICT教育の全国的な流れに乗り遅れないよう、電子黒板等の設備を全教室に配備する。

また、毎日の放課後において質問等がある生徒に対して自習できる教室と教員を配置した「授業の鉄人」制度を実施したり、テスト発表期間中の午後6時まで学校で勉強する「プロジェクトα」、社会の授業の中で実施される「ディベート」、自分が読みたくなった本をみんなにプレゼンして、どの本が読みたくなったか聞いている人が決定する大会「ビブリオバトル」、百人一首の大判で札を取り合う「大判百人一首大会」などの行事等をこれからも進化発展していきたい。